

夜明けのタンゴ

Tango del Amanecer

五木寛之



タンゴ

五木寛之



夜明けのタンゴ

五木寛之



印刷 1980年 5月 5日

発行 1980年 5月 10日

発行者 佐藤亮一

発行所 株式会社新潮社

〒162/東京都新宿区矢来町71/振替東京4-808

電話 { 業務部 (03) 266-5111
編集部 (03) 266-5411

印刷所 二光印刷株式会社

製本所 神田加藤製本

定価830円

©Hiroyuki Itsuki 1980 Printed in Japan

夜明けのタンゴ

SHINCHOSHA

Ⅰ

いきなり電話をかけてきやがって、三百万なんかならない？　って言うんです、チョクロの洋子が。

「三百万——円？」

と、思わずきき返しちゃった。洋子の口のききようが、あんまり気楽だったもんでね。なにしろ店先の電話だ。下着を買いにきた客の相手をしてたカミさんが、うたぐり深い目つきでじろつと見るじゃありませんか。

「冗談じゃねえよ。いったいおれをなんだと思ってるんだい。地道に洋品店をやって、かたーく暮してる商人あきんどなんだぜ。朝っぱらからそんな電話をかけてきて、またタンゲーロで飲みすぎの、二日酔いのってんじゃないだろうな。それとも徹

夜麻雀のやりすぎで、頭がおかしくなったのかね」

そのタンゲーロの話なんだわさ、と、洋子が電話のむこうで喋り出しました。

こうなると相手の迷惑なんぞお構いなし。

昔から喋りはじめると止まらないたちの女なんです。一度、楽屋での話の続きをステージの上にもで持ちこんで、さすがに批評家に叩かれたことがあった位。

「ふむ、ふむ。なるほど」

と、適当にあいづちを打ちながら煙草に火をつけて、相手の華麗なヴァリアシオンに耳を傾けるしかありません。

「と、つまり、そういうわけ」

洋子はどこでプレスをするのか不思議なくらいの一息のお喋りを終えて、ちょっと間をおくと、

「で、三百万円いるのよね」

「なるほど」

私は思わずため息をつきました。こうなるとカミさんのおもわくなんぞ気にしてはいられない。事件なんです、それもかなりの大事件。

「タンゲローがつぶれっちまったら、おれたちどこへ溜まりゃいいんだよ。よわっちゃうじゃないか」

「そうでしょう。だから三百万——」

「借金は五百って言ってたじゃないか」

「そう。でも、あたしが二百つくるつもりだから」

「そんな貯金があったのかい、お前さんに」

「昔のステージ衣裳いじよう、ぜんぶまとめて二百万で買うって人がいるの。近頃、復古調だかなんだか知らないけど、あたしがむかし使ってたみたいなドレスが結構、中古で売れるんだってさ。代官山でアール・デコのアクセサリー屋やってる男だけど」

「へえ。昔のステージ衣裳がね」

世の中、おかしなものだ、と、私は受話器を首にはさんで灰皿を引きよせました。麻布十番の商店街のはずれの、洋品店といえはきこえはいいが、まあ、男ものの下着から靴下、スポーツシャツにコーデウロイのスポン、ブラジャーやバンティまで、雑然と積みあげて売っているばつとしない繊維品雑貨の無四可堂むしかどうとい

うのが、私の店です。

いや、正確には私のカミさんの甲斐性で持てた小店と言うべきでしょうか。

店の開業資金はカミさんが用意し、店の名前は私が考えた、と言ったところで自慢にもなりやしません。

「とにかく一度会って相談しようよ」

と、私は洋子に言いました。

「相談したって、どうなるってんでもなさそうだが」

「キモちゃんにお金の話なんかするのは無意味だとわかっちゃいたけどね。あなたのバンマス時代のタキシードを質入れたって、五万にもならないだろうし」

「気持ちさ、気持ち。竜さんの店がつぶれるかもしれないのに、黙って眺めてるわけにもいかんだろ」

「気持ちじゃ一文にもならないわ」

「仲間には相談したのか」

「ふだん調子のいいこと言っても、いざとなると頼りないもんね、ハポネスの

男たちは。どいつもこいつも、そりや気の毒だな、ですましちゃうんだから。アミーゴって呼べるようなのは一人もいないわよ。無能力者でも、キモッちゃんだかね、会って相談しようなんて応じてくれた人」

「そりやメンバーのことには責任があるもの、おれは」

「ほら、ほら。まだバンマス気分が抜けないんだから、いやんなっちゃう。あんな、昔はともかく今は奥さんにすがって暮してるアクセサリー旦那じゃないの。出てくる時は、ちゃんとコーヒー代もらってくるのよ。三十分したら、六本木のクローバーで待つてるから来てちょうだい」

「わかった。じゃ後で」

ありがとうございました、と客を送り出した細君が、不気嫌そうな顔で私のほうをふり返ると、

「洋子さんでしょ、今の電話」

「うん」

「お金の話みたいだったわね」

「ま、そういうわけ」

「いつか洋子さんに誘われて出資した時のこと、忘れないでくださいね」

「わかってますよ」

そういえば二年ほど前に、一カ月後には必ず倍で売れるというエミール・ガレのガラス器を、竜さんと洋子と私の三人が二十万円ずつ持ち寄って引き取ったことがありました。結局、一カ月どころか三カ月たっても買手がつかず、仕方なしにいくらか値引きして処分したのを、細君は忘れないでいるのです。

「ちょっと出てくる」

「午後、税理士さんがみえるのよ。良介は学園祭の打ちあげとかでおそくなるし、お店のほう、見ていていただかないと困るんですけどね」

「昼までには帰ってきますよ」

私は細君に手をあげて店を出ました。気持ちのいい晩秋の金曜日で、商店街にも何となく活気がある。隣りの花屋さんの店先には、葉先をあざやかな赤に染めたポインセチアの鉢がずらりと並んでいます。私のお気に入りのミドリちゃんという若いアルバイトの女店員さんが、私を見て会釈すると、白い歯を見せて、

「いいお天気ですね。これからお散歩ですか」

「お散歩ってわけじゃないけど。きれいだね、そのポインセチア。そっちの葉先が白いのの特価品かい」

「ちがうわよ。今年はこういうのも流行りなの。これはこれで品がいいでしょ。おひとついかが？」

「ミドリちゃんがいると、どんな花でも色あせてみえるから損だね。社長にそう言っとかなきゃ」

「わあ、お上手」

ミドリちゃんは本当にぼつと赤くなると奥へ引っこんでしまいました。一般にわが国のサムライたちは、女性を讃美するギャラントリイというものがない。スペインや、ラテン・アメリカではそうではありません。通りすがりに、

「よう、鼻^{チ・エ・ニ}べちや^ヤさん」

と、声をかけるのが、美女に対する男のマナーというものです。鼻べちやというのは、もちろん、この場合はほめ言葉。日本から向うへ行った女子留学生が、そう言われて、最初はひどい差別語だと腹を立てた話はよく聞きます。

私も昔の商売がスペイン語に縁のある世界だったせいもあって、キザとか、伊^だ

達とかいった振る舞いには抵抗感がありません。可愛い娘さんを見ると、自然にほめちまう。細君としては、その辺に違和感があるらしいのですが、仕方がないことでしょう。

六本木の喫茶店まで、ぶらぶら歩いて行きます。近頃はやりのジョギングなどというのには縁がありませんが、歩き回るのが好きなたちなので、出来るだけタクシーなんぞは使わない。もちろん節約ということもある。カミさんの働きに頼ってる身分としては、当然のことです。

へ昔はよかったなあ

と、ふとつぶやきかけて、口をつぐみました。さいわいそばには誰もいず、そんな恥ずかしいせりふを聞いている人もありません。

へ昔はよかった

と、いう文句だけは口にしたくない。それが、せめてもの私の気取りなんですから。

昔話はやります。どっちかというと、そればかり。でも、昔は昔、今は今、昔はこうだった、ああだった、と、いつ果てるともない懐旧談に夜を徹すること

はあっても、昔はよかった、というエンディングにはしたくない。

まあ、タンゲローに集る連中の大半は、今ぱっとしない男や女たちばかりなので、話がナツメロっぽくなるのは仕方がありません。

そもそもタンゲローというスタンド喫茶、珈琲店カフェというものもはばかれるようなお粗末な店をやっている水原竜介という人物そのものが、過去の遺物といいましょうか、人間文化財と申しますか、六十歳にはまだ間があるという年配にしては古くさい男なんです。

水原竜介、昔の通り名を、ネオンの竜さんと呼んだもんです。ネオンだったって、赤い灯、青い灯のネオンサインじゃない。タンゴ・バンドの編成にはかかせないバンドネオンという楽器、あれを略して仲間うちじゃネオンって言ってました。まあ、私たちタンゴ島の楽師たちに限らず、大衆的な音楽をやってるミュージシャンたちは、言葉を略したり、ひっくり返して言ったりする国際的な傾向があるんです。

ジャズをズージャ、ピアノをヤノビー、なんていうのは、最近の中学生でも知ってるが、タンゴのことをゴンタなどと呼んだらちょっと判らないでしょうね、

近頃じゃ。

そう。私たちは昔、それも四半世紀ちかく昔にえらく売れたタンゴ・バンドのメンバーだったんです。私の店の無四可堂^{むしかどう}って変な名前も、べつに骨董^{こどう}を扱う気でつけたんじゃないやありません。スペイン語、要するにタンゴの本家本元のアルゼンチンで使われているスペイン語で、音楽のことをムシカっていう、そのもじりなんです。

タンゲローってのも、由緒ある名前。古いタンゴ・ファンなら、ははあ、ちょいとのとぞいてみようか、などと思うかもしれない。アルゼンチン・タンゴのスタンダードナンバーのひとつに、ヘタンゲーラ^{ヘタンゲーラ}、って曲があるでしょう。要するにヘタンゴに夢中な娘さん^{ヘタンゴに夢中な娘さん}って位の意味ですが、まあ、あんまり上品な令嬢^{れいじやう}じゃなくって、タンゴをやってる踊り場などへ日参したりするタンゴ狂^{くる}いのおねえちゃんのことを言うらしい。それが男になると、タンゲロー。ヘタンゴ狂^{くる}いの男^{おとこ}、まあ、ある人がいみじくも書いてらっしゃったけど、単なる愛好者というより、ケモノへんがつくようなタンゴ一辺倒の物好きを指すんです。

店の名前が、タンゲロー。

へ本場の珈琲と本場のタンゴ音楽の店

と、小汚ない店の前に看板が出ています。本場の珈琲ってのはあやしいけれども、まあ、タンゴのほうはまがいものじゃありません。

店名にゆかりの曲、タンゲラにしても、マリアノ・モレスやフランチーニ・ポンティエルの楽団のレコードだけじゃなく、かつてこの私、元オルケスタ・ティピカ・コラソンのマエストロ、つまりバンド・マスタートですね、そのバンマスの本元宏がひきいる楽団の演奏レコードまでちゃんとあるんですから。

もちろん、今日もう私たちのバンドはありません。そもそもタンゴなんて種類の音楽が、一部の熱心な愛好者や奇特定の研究家のグループをのぞいては、本場のアルゼンチンでさえもパッとしなくなってしまった状態では、オルケスタ・ティピカ・コラソンなんて楽団の名前を知っている人も、あまりいないでしょう。

でも、昔はそうじゃなかった。戦前のある時期、そして戦後から十年あまり、タンゴが大衆音楽の華だった時代があったんですよ。アルゼンチンの首都ブエノスアイレスの勝手口にあたる港町ラ・ボカ地区のさらに裏通り、荒くれ船乗りたちさえ怖れるといわれたバラカス一带の暗黒街に生れた夜の花、タンゴ音楽には、

約百年間で世界中をその四分の二拍子のリズムで熱狂させた黄金時代ともいうべき全盛期があったんです。

今だってもちろん、タンゴに夢中になるタンゲラ、タンゲロたちが、いわけじやありません。コンサートも開かれているし、目立たずとも優れたバンドがあちこちで活動を続けている。また、北は小樽から南は長崎、松山まで、全国にタンゴを愛する人たちのサークルが月例会を開いたり、シンポジウムを行ったり、時には生演奏を楽しんだり、地下水脈のようにタンゴのメロディは流れつづけているのです。でも、やはり桐一葉、って感じはありますね。なんつたつて、タンゴは演奏をレコードできくだけでなく、生の歌にふれ、また踊ってこそ本当にその良さがわかる音楽ですもの。

最近じゃ、時どきひょこつとタンゴを踊るシーンが映画やCMに登場したりするけど、あれはやはりノスタルジーを利用して人々の関心をひこうという手じゃないのかな。

まあ、とにかく、昔はタンゴが大したものだったんです。生のステージは勿論、タンゴのレコードを専門にきかせるタンゴ喫茶ってやつが東京にも何十軒となく